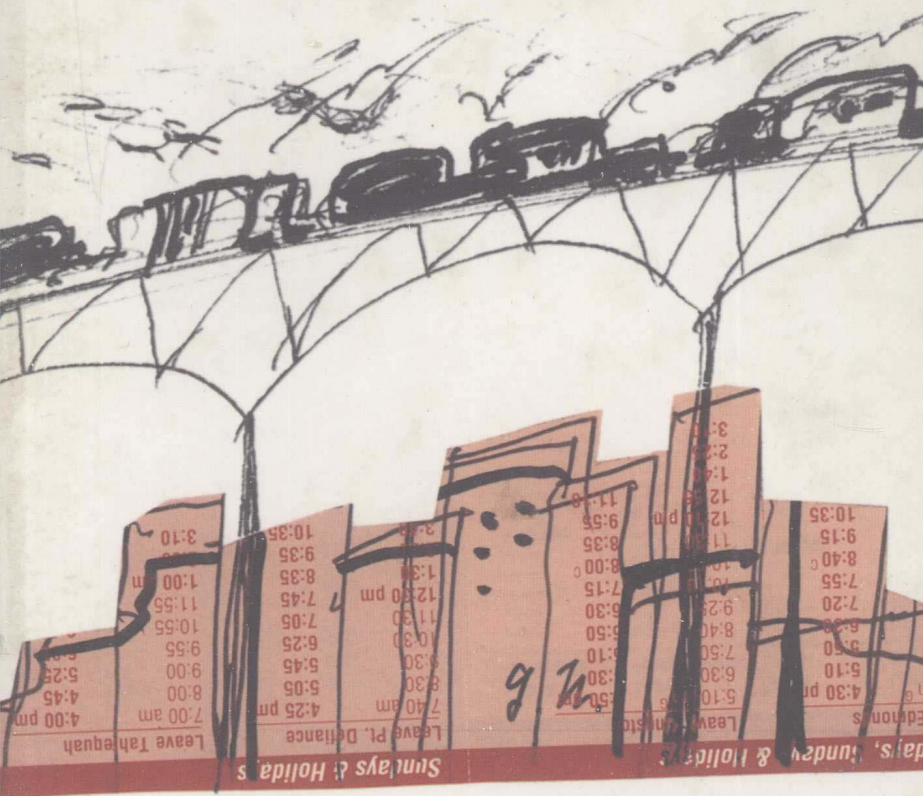


きょうがきのうに

田中小実昌



読売新聞社

きょうがきめうに

ト小実昌



読売新聞社

ぎょうがきのうに 定価 1 3 0 0 円

第 1 刷 1 9 8 9 年(平成元年)12月 4 日

著 者 田中小実昌

編集人 篠原 義近

発行人 杉林 昇

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町 1 の 7 の 1 〒1 0 0 - 5 5

大阪市北区野崎町 8 の 1 0 〒5 3 0

北九州市小倉北区明和町 1 の 1 1 〒8 0 2

名古屋市中区栄 1 の 1 7 の 6 〒4 6 0

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

ISBN4-643-89086-X C0093

落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

シアトルにきた夜 五

フロートイング・ブリッジ 三〇

日々がうしろにのびていく 五四

海辺の鮭バー 八二

アテネ、ベルリン、シアトルの雨 一〇九

カリフォルニア巻き 一三九

マリとパスカル 一六八

トミーの家で 二〇二

フランス胡瓜 二二六

旅のおわり 二五七

装画 野見山曉治
装丁 岩黒 永興

きょうがきのうに

シアトルにきた夜

「まねき」にいき、バーにはいると、「まあ、しばらくね」とシイちゃんが言った。シイちゃんはバーテンだ。

でも、シイちゃんは、もとはこのまねきのオーナー（経営者）だった。オーナーが自分の店を売り、そして、その店のバーテンとしてはたらいっているなんて、ニホンではきいたことがない。まねきはシアトルの日本レストランだ。このあたりは、かつてはニホン町だったという。そのころの、いろんな店などを書きこんだ地図を見ると、銭湯（町のフロ屋）が三軒も四軒も、トーフ屋もなん軒か、また桂庵（けいあん）というのも四軒ぐらいある。桂庵は口入れ屋のこと、私立の職業紹介所だけど、時代小説にでくるような古い言葉だ。

この地図は、もと読売新聞記者の伊藤一男さんが書いた『北米百年桜』の表紙の裏にでてるのだが、たぶん明治のおわりか大正のはじめごろの地図だろう。

いや、そんなころなのに、桂庵なんて江戸時代の古い言葉をつかっている。海外のニホン町には、古いニホン語がそのままのこっていることがある。明治のおわりどころか、去年の夏、シアトルにきたとき、やはりこの近くのニホン床屋（床屋って言葉も古いんだよねあ。理髪店か。これまた古くて、理容院。ちかごろはバーバーってのもおおい）で読んだ北米報知という邦字新聞には、「父が八十一歳で往生しました」という死亡広告がでていた。大往生の往生だ。いまだき、往生なんて言葉を新聞の死亡広告につかうなんて、実際に見なければ、想像もできないことだった。こんなふうに、海外の邦人社会では、古い古いニホン語がのこっていることがある。

ついでだが、邦字新聞とか邦人社会って言葉も古い。日本語新聞、日本人社会ってところだろうか。

さっきから、北米という言葉がでてきたが、北米といえは、南米やメキシコなどの中米とわけ、アメリカ合衆国やカナダのことをさす場合もあるし、ニューヨークやボストンあたりの感じもするけど、このシアトルなどは北西部と言っている。くわしくは、パシフィック・ノース・ウエスト。太平洋岸北西部ってことになる。

れいのニホン町の地図だが、このまねきがちゃんとでている。つまり長い歴史をもつ、ゆいしよのある日本レストランなのだけど、まねきのもとのオーナーで、いまはバーテンのシイちゃん、ぜんぜん店の自慢などはせず「創業のときとは」オーナーもかわったし……」とあっさりしている。

伊藤さんの『北米百年桜』の地図を見ると、ニホン人経営のクリーニング屋や食料品店など、あまり大きくはない店だろうが、びっしりならんでたようだ。

それが、いつのまにか、ニホン人の店やホテルがなくなって、いまでは、チャイナタウンとよばれている。ジャパントウンがチャイナタウンになった。おなじようなところは、このシアトルだけでなく、ほかにもありそうだ。

そのうつりかわりの、いちばんの契機は、第二次大戦でニホン人が強制キャンプに連行され、そのあとに中国人がはいってきたためだ、ということもきいた。そんなこともあっただろう。また、そういう説明は、たいへんにわかりやすい。しかし、戦争をはさんで、ニホン人たちには困難な年月がつづいたにしても、だんだん、ニホン人が白人ほどではなくても、ふつうの町の人たちみたいになったせいではないか、とぼくはおもう。

ニホン人が風変りで、なにかも習慣がちがう東洋人、ふしぎなストレンジャーではなくなり、ちゃんと英語をしゃべる、ふつうの町の人たちに近くなり、自分たちだけでニホン町をつくり、あつまって住んで、トーフに醬油しょうゆをかけてたべることもしなくなったために、ニホン町はなくなったのではないのか。つまり、ニホン町の必要がなくなったのだ。

中国人だって、そんなふうにアメリカの土地の人たちになつてる者はおおい。だいいち中国人の移民の歴史のほうが、よっぽど古い。ところが、そういう、すっかり土地の人になった中国人もおおいが、おたがい中国語をしゃべり、とくに料理は、中国ふうの料理をたべてる、新しい中

国人もたくさんいる。

いま、ベトナムの難民という人たちを世界じゅうで見かける。オーストラリアにも、ずいぶんおおぜい移住している。パリにだって、ベトナム料理店がたくさんできた。でも、ぼくのとぼしい知識では、あの人たちは、どうも中国系のベトナム人のようだ。

ベトナム戦争というのは、北のハノイと南のサイゴンがたたかって、サイゴンが負けた戦争ではないのか。そして、サイゴンは中国人の町だったときいている。シンガポールのように、その人口の大半は中国人だったという。

こんなふうに、いろんなことがわからない。いや、わかってることなどあるのだろうか。しかし、わからない、と逆にいばつてもしょうがない。ついでだが、ジャバニーズタウンとは言わず、チャイナタウンのように、ジャパンタウンとよんでるのが、ぼくにはおもしろい。

もとはジャパンタウン（ニホン町）だったのがチャイナタウンになったと言っても、中国料理店などがならんでるわけではない。中国料理店もある。だけど、どこにあるのかも、ぼくはおぼえていない。

だから、サンフランシスコのチャイナタウンとはうんとちがう。サンフランシスコのはアメリカでもとくべつ大きくて、にぎやかなチャイナタウンだ。あるいて十五分ぐらいも繁華街がつづき、それと交差する通りもいくつもあって、中国料理店、中国菓子屋、おみやげ屋がならんで、観光客がぞろぞろあるいてる。

観光客はあまり知らないが、この繁華街と並行して、坂の上のほうに、バスがはしるもつと広い通りがあり、肉屋、魚屋、八百屋など、食料品店がいっぱいある。魚屋では生きたカエルも売っていて、ぴょんぴょん逃げるカエルを客と店員がおっかけたりする。

このシアトルから国境をこえてカナダのバンクーバーまでは、クルマで三時間半ぐらいだが、バンクーバーのチャイナタウンが大きいのはおどろいた。アメリカじゅうで、サンフランシスコについて大きなチャイナタウンだろう。

ロサンゼルス、チャイナタウンも面積は広いが閑散としている。バンクーバーの中国街は大きくて厚みがあって、活気が見られる。

ニューヨークのチャイナタウンは、マンハッタンの南のはしのほうにイタリア街とならんであるが、どちらもずいぶんさびれた。イタリア街はブルックリンのほうにうつたという感じだ。シアトルのこのチャイナタウンは、それとぜんぜんくらべものにならない。中国人の店も、あちらにぼつん、こちらに二、三軒といったぐあいで、チャイナタウンとよばれていても、中国人街、町にはなっていない。

これまたついでだが、中国の人たちはチャイナタウンのことを、中国城と書くようだ。サンフランシスコのチャイナタウンの魚屋や肉屋のおおい通りにはポストオフィス（郵便局）もあって、たしか中国城郵政局という大きな中国語のプレートがでていた。窓口ではたらいてる人も、みんな中国系の人たちだ。

アメリカで、たとえハワイでも、ニホン語で書いたポストオフィスの標示などはない。また、ほかの外国語の標示も見たことはない。サンフランシスコの中国城郵政局はよほどとくべつのものだろう。ここでは、中国語の新聞が二十種類とか三十種類とかででるともきいた。

日本レストランまねきは坂の途中にある。そして坂をあがった反対側の角に、これも日本レストランの扇家があるが、このあたりは空地だらけのようにおもっていた。

どうってことはない空地だ。たいして雑草もはえていない。地肌もさほど白っぽくもなく、また赤くもない。土色をした土で、まことにおもしろくない空地だ、とひとりでわる口を言った。

ところが、たとえば、まねきの両側は空地だとおもったのに、空地なんかないんだなあ。これは記憶ちがいなんて、かんたんなことではない。

ぼくはとくべつおかしな男で、こんなふうにかってにおもいこんだりするんだろうか。へたをする、たいていのことがおもいこみなのではないか。

さて、まねきの両側は空地でないとすると、なんなの？　これが、またわからない。シアトルに滞在するようになって、十なん年もたつ。こんどシアトルにきてからも二十日はすぎている。そのあいだ、あるときは毎晩のように、すくなくとも一日おきには、このあたりにきている。それなのにわからない。

それで、いままではうかうかしてきたが、これを書いてることだし、気をつけて見てやろうと

おもった。一昨夜のことだ。でも、だめだった。いつものことだけど、酔っぱらってしまったのだ。だから、きのうは、あかるいうちから、でかけてきた。もつとも、いまは夏で、ここは緯度も高いし、夏時間でもあって、午後九時ごろにならないと、日は暮れない。

きのう、まねきのある坂をのぼってきたのは、午後七時すぎで、まるつきりあかるく、カンカン照りとまではいなくても、空も道路も建物もなにかもあかるく、ぼくの目に見えないものはなかった。

ところが、まねきの坂の下側のおとなりがなんだかわからない。そのまたおとなりは窓ガラスにコピー屋の看板がでていたが、商売をやっているのかどうか。コピー屋のとなりは、おどろいたことに、ぼくもなんだかきいているニホン床屋の「MASAO BARBER」だった。

まねきの坂の上のほうのとなりもわからない。だだっ広いレンガ壁みたいなのがつづいている。窓も入口もなんにもない、大きな建物だ。まねきは空地のあいだの平屋だとおもったのに、でかい建物の一階だった。古い建物で、戦後の建物ではないだろう。ぼくはあきれかえって、まねきにはいっていった。

まねきの入口は広くない。せいぜい一メートルぐらいのものだろう。それが、のっぺらぼうみたいなレンガ壁のあいだにあって、そのよこに、やはりレンガ壁のなかの銃眼のような、ちいさなショーウィンドーがあつて、招き猫がちよこんとすわっている。

まねきとは、いい店の名前だが、ニホンでは、調布から吉祥寺にいくバスで一度見たきりだ。

もつとも、シアトルのニホン町に、このまねきができた明治のころには、まねきという料理店はめずらしくなかったのかもしれない。海外のニホン町に古いニホン語がそのままのこつてるように、まねきという料理屋・飲屋の名前はニホンではなくなり、このシアトルにのこつたのか。

古いニホン語のことはあまりおどろかないが、海外に古い土佐犬がのこつてるときいたときは、へえ、とおもった。感動してしまった、と言えはわかりやすいだろうが、感動という言葉は、めつたにつかうものではないと考えてるので、やめておく。

「ニホンでは、もうとつくになくなった、古い古い種類の土佐犬だが、海外ではいまでも生きていて、ときたま闘犬の試合にでてくるんですよ」と高知で土佐犬を飼っている老人が、ほんとになつかしそうに言った。

まねきの入口をはいると、奥のほうにのびた廊下がある。これを英語ではホールという。いや入口もひつくるめてホールなのだが、ニホンでホールと言えは、厚生年金ホールとかガス・ホールとかよばれてるものなので、ホールがそのままはつかえない。

かと言って、廊下でも、なんだがちがうようだし、入口も玄関ではニホン語すぎる。だいいち、玄関ってものはニホンにだけしかないのではないか。

ぼくは翻訳をやったことがあるが、いつも、あいすまないみたいな気持だった。翻訳は裏切り行為だ、とつくづく感じたこともある。「だから、自分は翻訳書は読まず、翻訳もせず、原書で読んで、原書で考えています」という人がいる。まともな人のようにだが、こんな人も、ぼくは

きらい。

たとえ翻訳は裏切り行為だとしても、それでも、なにかをニホン語に翻訳したくてしようがないことがあるものだ。

まねきの、入口と、廊下で、また立ちどまってしまったが、廊下を二、三メートルいくと、右がレセプション（受付）、左がバーになっている。もつとも、レセプションにはたいいてい人はいない。まねきはそんなに大きな店ではない。そしてバーには、もとはオーナーで、いまはバーテンのシイちゃんがいる。

まねきのバーは大きくない。いや、アメリカでぼくが飲んだバーでは、いちばんちいさいバーかもしれない。日本レストランのなかの、それこそ片すみにあるバーだから、ちいさくてもあたりまえか。

バーは一室になっていて、小ぢんまりし、ざわついたところがない。アメリカではがらんと大きなバーがふつうで、まるで体育館で飲んでるような気がする。ぼくが新宿ゴールデン街のせまいせまい飲屋やバーに慣れてるせいかもしれない。新宿ゴールデン街では、飲屋とバーの区別もない。

ま、そんなふうなので、まねきのこのバーにはいると、小ぢんまりと居心地のいい、つまりコーナー・コーナーにきたみたい。

バーの廊下側の壁をかこんで「J」型のカウンターがあり、バーにはいつてすぐのみじかいほうの

カウンターに、ぼくはふたりならんで腰をおろす。ここは二人でいっばい。長いほうのカウンターだって四人掛けだ。

もつとも、カウンターのうしろには、ちいさな丸テーブルが二つあり、奥は一段高くなって、テーブルもあるようだが、そこまでいったことはない。ほんの五、六歩のところだけど、その五、六歩がめんどくさい。ノンベエはものぐさだ。

カウンターのなかにはシイちゃんがいる。シイちゃんなんて、かわいい名前だけど、シイちゃんはいまはバーテンだけど、もとは、このまねきのオーナーだったし、かなりの年齢だ。お孫さんがいるともぎいた。

だったら、おばあちやまのバーテンだ。もとはその店のオーナーだが、いまはバーテンというのも、ニホンではめずらしいが、おばあちやまのバーテンというのもめずらしい。

シイちゃんはきれいなおばあさんだ。それも、あつさりきれいで、こんなおばあさんはすくない。

ごくたまにだが、たいへんに美人のおばあさんがいる。なくなった大宅壮一の奥さんや、鳩山邦夫代議士の祖母、鳩山一郎元首相の奥さんも歳とつても、とっても美人で上品だった。

しかし、シイちゃんはきれいなおばあさんだけど、その気性のように、さっぱりしたきれいさで、おまけにキュートでもある。

カウンターのなかの、いつもシイちゃんが腰をおろしてる、ちょうど顔のあたりに、廊下との